

も ん オ ケ 15 周 年 記 念



下
曲曲
曲曲

ポップス楽団も創る
おいしいレシピ

JA ORCHESTRA
ny.
001
オーケストラ

この小冊子は、団長である内山有希夫が、コンサートのパンフレットなど折に触れて書き綴った文章を集めたものです。

MENU

1. 楽しく凛々しく、オンガクだ！
2. ポップスとは、
飾らない自由な精神のことである。
3. 初めに人ありき！
4. ジャストフィットな服。
5. 名曲に触れたい！
6. 練習と本番。
7. やっぱり……門仲が好きだ！



レシピ1 オードブル

楽しく凛々しく、オンガクだ！



〈もんなか・もんじゃ・オーケストラ〉は初期から「楽しく凛々しくオンガクだ！」というキャッチフレーズで活動してきました。

「楽しく」……これはもちろん、(特に)アマチュアのたいなる特権、これなくして何のための音楽でしょう？「凛々しく」……これは聴く人に対しての姿勢です。たったひとつの音にも心を込める、これはコミュニケーションの出発点です。最後の「オンガクだ！」とは「音楽(演奏)しよう」という積極的表現です。

さて、この「楽しむ」ということをどう考えたらいいでしょう。「(コンサートで)いい演奏をする」とか「お客様を満員にする」とか「コンクールでいい成績を修める」とか……何か目標に向かって遮二無二突き進む過程で、あわよくば

得られるもの、つまり目標とは別の“副産物”という考え方があります。

しかし「楽しく」というものは、それ自体を「目標」に掲げるくらいに強い気持ちで追求しないと、そうそう得ることができないものなのです。「楽しく」よりも上位に別の目標があるのではなく、どんな物にも先立って「楽しく」が存在する……これがわたしの考える究極のアマチュア精神です。

例えばその最たるものが子供達です。もちろん、本人が望んでいないような大人の押し付け的な「指導」などない環境としたならば、音や絵などの分野では物凄く自由に豊かな創造性を発揮します。現に自分の子供時代を思い起こせばわかることです。時を忘れて遊んでいた……あの頃です。

もっとも大人の世界では、これだけ天真爛漫な創造性を発揮することは困難です。それは才能云々というよりも、一般社会では様々な束縛やストレスに曝されていて、楽器を手にしたからと言って即自分の感性をオープンにしてやるこ

とがなかなか難しいからです。

ただし、入り口はあります。ひとつは「競争しないで共鳴しようよ」という精神。これがリラックスの源です。そしてもうひとつは「いま、ここにしかない（あなたのための）譜面（アレンジ）」によって「こうでなければならない」というような模範（演奏）的プレッシャーから解放されること。全てはひとりひとりの（身体と心の）解放から始まるのです。空虚な理想像ではなく「いま、ここで生きることの絶対的肯定」ということを出発点とした発想、それがわたしの考えるポップス楽団なのです。（2006. 7. 17）

レシピ2 スープ

ポップスとは、飾らない自由な精神のことである。



少年時代、私の傍にあった唯一の楽器はピアノでもギターでもな

く一本のリコーダー（縦笛）でした。図書館にある曲集を自分流に写し換えて、ショパンのワルツやバッハのフーガ、チゴイネルワイゼンなどを片っ端から吹いていました。当然音域に詰まると上へ行ったり下へ行ったりの大騒ぎ。

また、当時ラジオから耳にしたベンチャーズのエレキ・サウンドもこの楽器で器用にこなしていたのです。「デケデケデケ……」と頭の中ではそのつもり。それが私の編曲の原風景であり、同時にポップスとは何かを無意識の内に身体に刻印した行為だったのでしょ

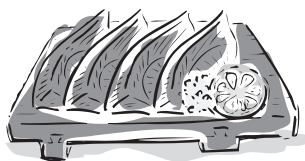
う。最近クラシック系のソリストが「レパートリーにはクラシックよりポップスまで幅広く取り入れ……」とよく言われます。そしてそのCDには大概ビートルズの「イエスタデイ」なんかが入っているのです。ポップスとはジャンルではなく「飾り気のない、自由な精神」のことを指すのです。「縦笛でもショパンのワルツは吹ける！」……少年時代に芽生えたそんな心意気が、下町ポップス楽団

を標榜するもんオケの現在のサウンドに繋がっているのかもしれませんが。

(2005. 3. 30)

レシピ3 魚料理

初めに人ありき！



4周年を迎えた下町ポップス楽団。最近、団員がにわか増殖中です。

創立時の11名から考えると今や3倍にもなろうとしています。一般のクラシックオケや吹奏楽、ビッグバンド等であれば「増殖」という言葉は使わないでしょう。それぞれ基本のスタイル（編成）があるから人数が揃えば「打止め」ということになります。しかしこのもんオケの場合はスタイル（編成）があらかじめ決まっているわけではないので、どんな楽器が増えてくるか予想がつかないし、またどんな楽器であれ入団希望者はすべて受け入れています。

幸い現在のところあまり極端には片寄らずバラエティー豊かな楽器編成になっていますが、だからと言って予断は許さないのです。というわけで自分で言うのも何ですが、このオケは並み大抵？の編曲者では務まらない、と思います。

もともとどんな場合においても演奏者の具体的な音をイメージして編曲するという方法を実行して来た私ですが、このオケは初心者から経験者まで様々ですから、さらにひとりひとりの状況を見ながら、バランスを考えながらということになります。上手・下手という競争原理ではなく、みんなで補いながら「楽しく凛々しくオンガクだ！」を合い言葉に、まさに同じ音楽に向かって邁進していくのです。

「御隠居さん、最近のもんオケはだいぶ音が厚いそうですね」

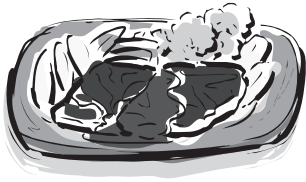
「いやいやクマさん……人情が厚いんだよ！」

はい、お後がよろしいようで……。

(2005. 10. 20)

レシピ4 肉料理

ジャストフィットの服。



編曲とは、その時と場所、特に編成に合わせて原曲に別の衣装をまとわせること、にも喩えられるかもしれません。特にポップスとかジャズなどは、もともと原曲をどう「自分らしく」演奏するか……という音楽なので、ある意味でとても編曲が大事なのです。

先日、愛媛県松山市のとある高校の吹奏楽部から依頼を受け、コンクールのための自由曲を編曲しました。顧問の先生がジャズなどが好きということもあって、J. ガーシュウインの「ラプソディ・イン・ブルー」をファンク風のビートで編曲したのですが、そのアイデアはともかく、多くの学校が、自分たちの編成や技量に合わせて書き下ろし楽譜を使うということもなく、既成の楽譜を実際の編成に合わせることに四苦八苦してい

るようにも思えました。

やはり身体のサイズを測って丁寧にしつらえた服は着心地がいいはずなのです。窮屈でもダブダブでもちょっとしっくりこない。サイズや体型がぴたり合った服は、それを見ている側も格好よく感じるものです。

オリジナルな編曲の楽譜を演奏する。これはある意味でとても贅沢なことですが、音楽のあるべき姿、当たり前のことなんですね。特にもんオケの場合、はじめに楽器編成を固定していないので、当然オリジナルな編曲を必要とするのです。

いま、この精神が広がって、他にも新しいポップス楽団が新しく生まれつつあります。同時に、自分たちにフィットした衣装でもあるその楽団ならではの編成・楽曲、そしてそれを可能にする楽譜（編曲）の大切さが理解されてきています。

今回、生誕250年イベントにあやかってわたしたちも演奏させていただくモーツァルトメドレー。もちろん偉大なる音楽家に敬意を

払って、しかし忠誠は誓わず？ わたしたちの身の丈に合ったモーツァルトを一生懸命演奏します。どうぞよろしく。(2006.3.13)

レシピ5 サラダ

名曲に触れたい！



名曲……それは古今東西様々であり、どんな名曲と出会ってきたか……、個人個人の体験によっても異なります。

FMで「私の名盤」という番組がありました。有名人が、その人なりの音楽との出会いを語るのですが、まさに（名曲との）出会いとは「初め偶然、後で振り返れば必然」という人生のドラマだと感じました。

下町ポップス楽団を自称する〈もんなか・もんじゃ・オーケストラ〉にとっては、それぞれ、常に名曲との幸せな出会いに明け暮れているとも言えますが、今

回はスイングとラテンの極め付け！ ともいえる名曲たちに挑戦してみました。

特に「♪チャッチャッ、チャチャチャチャッ、チャチャチャチャチャッ、チャチャチャチャチャッ、チャチャチャチャチャッ〜」という（笑）「マンボ No.5」は「ジャジャジャジャー、ジャジャジャジャー……」という（言わずと知れたベートーベンの）「シンフォニー No.5」にも匹敵する“名曲度”を誇っていると信じます。

名曲とは、一度聴いただけで身体に刻印されるような魔力を持ち、また、一度はこの手で触れてみたい……という甘い誘惑に駆られるような存在なのです。もちろん、最大なる敬意を持って、この手で名曲たちに触れさせていただきます。どうか私たちの“心意気”を受けとめていただければ幸いです。(2007. 9. 16)

© 2007 年プログラムから
〈どちらがお好み？もんおケ謹製「スイング丼」or「ラテン弁当」〉
イン・ザ・ムード / マンボ・No5 / A
列車で行こう / マカレナ / テイク・ファイブ / ベサメ・ムーチョ / 東京ブギウギ / クマーナ

レシピ6 デザート

練習と本番



オーケストラやバンドにとって〈練習〉とは何でしょう？ 一般的に言えば〈本番〉で良い演奏をするための準備ということができません。

もんオケの場合、月2回（年24回）と1泊2日の合宿……。それで18曲を仕上げる。これではどう考えても練習不足です。練習日が少ないということは新曲ができたなら「一旦、家に持ち帰って次回に合わせる」なんて呑気なことは言ってもらえません。即、全体で合わせていきます。

そのため、正直言って、最初はBoro-Boro & Gata-Gataです。突然のエンストもあります。でも仕方ありません。やってやってやり続けるのです。傍から見る練習風景は、多分、残酷です。団長はまるで指揮棒ならぬ鞭を手にした猛

獣使いです、ビシーっ！ ビシーっ！……。それでも団員は何故か楽しそうだから不思議です。

ムチもあるならアメはどうか……。終了後のビール？ でもそれは自腹だからアメと呼んでイイものかどうか……。こうしてみると本来〈本番〉のための〈練習〉であった筈なのに、皆、〈練習〉そのものを楽しんでいるように思えます。

何故かと言えば、〈練習〉とは「模範とすべき演奏を少しでも体得しようという修練の場」ではなく、「未知の音がだんだんベールを脱いで〈歴史的瞬間〉に立ち会える場」に他ならないからです。

そこには「自分たちの演奏が“世界初演”である」という団員なりの小さな自負があるように思えます。〈本番〉である今日のひと時、団員のそんな喜びを、お集まりのお客様と分かち合えれば嬉しいと考えます。（2008. 9. 6）

◎もんオケ恒例の合宿

毎年8月最後の土日に実施。初期は千葉県岩井海岸の民宿。その後神奈川県河口湖近くに。現在は長野県富士見高原で“美味しい空気”をご馳走に練習三昧！

やっぱり……門仲が好き！



2001年から約10年、門前仲町の地に腰をすえて活動を続けて来た、わたしたち〈もんなか・もんじゃ・オーケストラ〉。昨年のコンサートを最後に拠点である〈もんでんホール〉を離れ、現在では住吉駅近くの公共施設で毎月の練習をしています。

実は、そうなるからしばらくの間も、中野から東西線に乗ると、なぜか、そのまま門前仲町駅まで行ってしまったものです。目を閉じると忘れられない風景やお店などが脳裏に甦ります。まさに草創期のオーケストラはその青春時代までを、この地で過ごしたんだなと、改めて感じるのです。

さて、今回からお世話になるこの会場、古石場文化センター。ここも深川の一隅です。

別にどこで公演したっていいじ

ゃないか、という考えもありましょう。でも、だからこそ、場所・地域にこだわりたくなります。世界的映画監督・小津安二郎もこの地に縁があるといえます。深川という、江戸文化の人情と粋を伝える町でこそ、私たちの音楽を支える見えざる感性をゆっくりと醸成したいのです。

「音が厚いんじゃない、人情が厚いんだ」なんて気の利いた台詞を言えるのも、この地に留まっているからこそではありませんか？

そんなわけで、しばらくこの古石場でのコンサートは続けていきたいと考えています。そしてずっと続いてきた打ち上げ会場も、門仲のもんじゃ焼きの名店「三久」と、こちらも相場が決まっていますねえ。

今日のコンサートがうまくいくようにと、富岡八幡宮と深川不動尊、ダブルでお参りできるのも門仲でこそです。

みなさま、まだ不慣れな新しい場所でのコンサート、最後までご声援よろしくお願い致します。

(2013. 9. 1)

15年を彩る素敵なゲストたち

2003年

春口雅子さん(童謡歌手)

★温かな笑顔と美しい声で親しみやすく童謡を歌ってくれました。内山作品「さくらほんのり」も和みの逸品。

2004年

羽毛田耕士さん(トランペット)

★ジャズトランペットの第一人者。「タクシードライバー」の絶妙なソロは未だに印象に残っています。

2005年

大塚雄一さん(アコーディオン)

★ボタンアコーディオンの超絶技巧もさることながら、パリの裏通りを思わせる吟遊詩人風のボーカルも決まっていました。

2008年

琉音 From MARVEL(沖縄音楽ユニット)

★沖縄出身の歌手・琉音さんと三線奏者の根岸和寿さんのユニット。沖縄ソウルが横溢したオリジナル曲に团员も一緒に踊ってしまいました。

2010年

池主保さん(カンツォーネ歌手)

★本格的発声法で熱唱するナポリターナの数々は



圧巻。人生の喜怒哀楽が解けあう豊かな表現力に圧倒されました。

〈10周年記念コンサート(2011年)〉

神山てんがいさん・すずきちえさん

(パフォーマンス、歌、司会)

★寸劇構成から、「プカプカ」や「カントリーロード」の歌唱、そして軽妙な司会までまさにの活躍でした。

太田光宏さん(ギター)

★“うたものギタリスト”とも呼ばれるその人間味溢れるプレイは、聴く人を引き付ける大らかさに満ちています。アイリッシュも得意。

大淵愛子さん(フィドル)

★もんオケ卒業生のひとり。いまでは日本のアイリッシュ音楽の世界では知らぬ者はいないという若手 No. 1 のバイオリニスト、いやフィドラーというのが正解ですね。久々の郷帰り。

2012年

福満景子さん(ナレーション)

★コンサートの特集は団

員による「わたしの思い

出の曲」。さまざまな“思い出”を団員に代わって朗読していただいたのが福満さん。そのナレーションには観客



席だけでなくステージ（出演者）からも感動の涙が溢れました。その後は毎回司会者として、サポートメンバーの一人になっていただいています。

2013年

takamiさん（シンガー & ソングライター）

★シンガー & ソングライターとしてとても素敵な楽曲を作る takami さん。

子育てをしながらまた新たな境地に挑んでいます。久しぶりに聴いたその歌声はピュアそのもの。



さらに優しさと説得力が増していました。お客様のみならず団員にも好評でした。

山北弘一さん（パーカッション）

★ takami さんのパートナーでもある山北さん。彼が学生時代からの知人ですが、いつしか家族を持って心機一転したのでしょうか？ 久しぶりに聴いたそのプレイは相当パワーが付き、なおかつ洗練されていました。それ以来、ほぼレギュラーとして参加していただいています。

2014年

海田明裕さん（ウクレレ、スチールギター、歌）

★ジャンルは違っても多く共通する考

え方を持つ海田さん。「軽音楽がやってきた」という企画を良く理解してくれて、司会の福満さんとの楽しいトークを展開してくれました。

もちろん、ハワイ州知事お墨付?! といわれるのウクレレやスチールギターなど、その価値あるプレイは観客の目と耳を釘付けにしました。

三島一洋さん（パーカッション）

★初期の頃からもんオケに関わり熱血指導を注いでくれた三島さん。いまは広島の地にいますが、



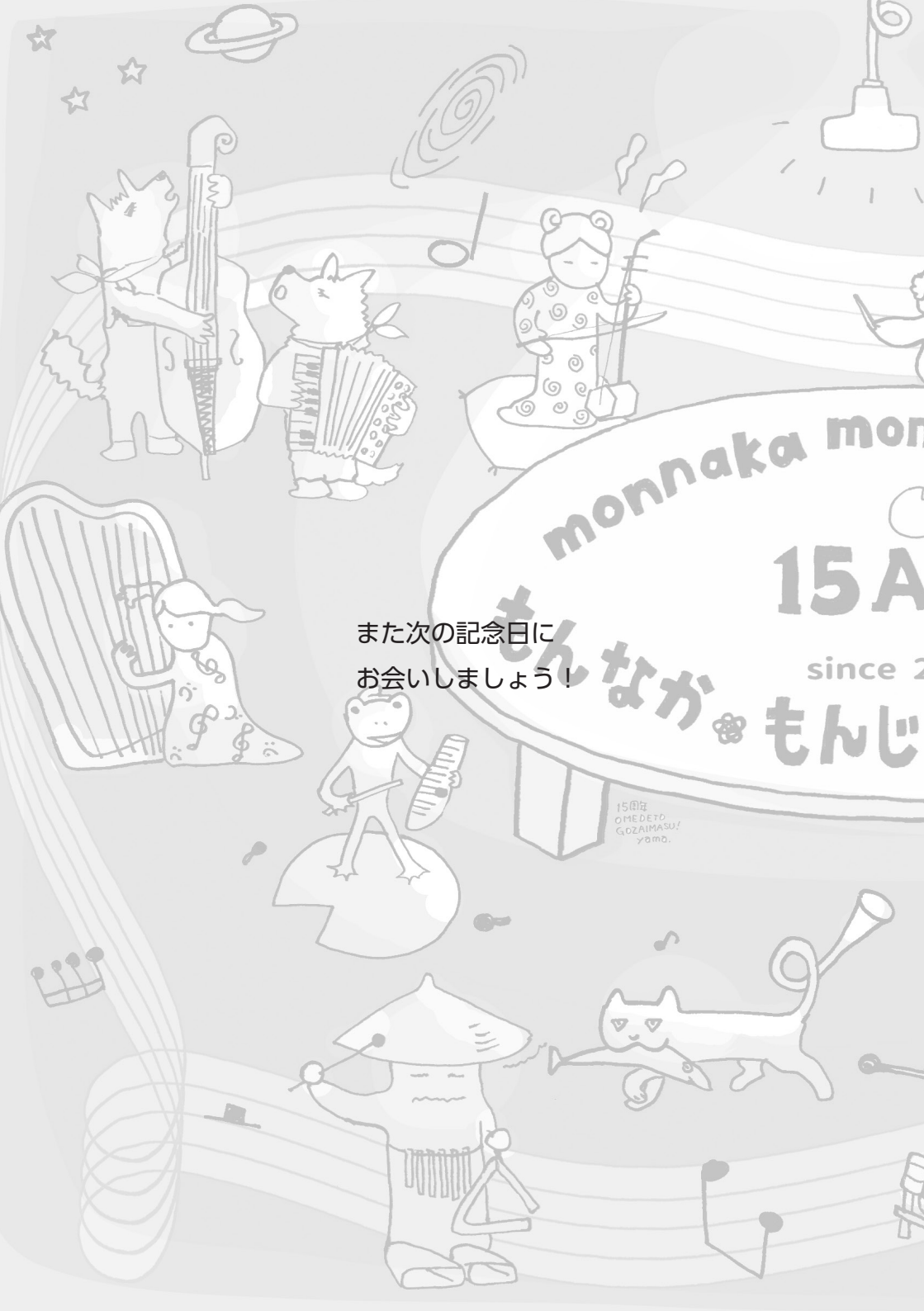
久しぶりに上京。このコンサートでは3パーカッションを率い、本格的ブラジル音楽の醍醐味を目の当たりにさせてくれました。

2015年

澤渡直子さん（二胡）

★もんオケ卒業生。いまではプロ二胡奏者としてライブに指導にと忙しい毎日です。そんな中、声をかけると駆け付けてくれました。このコンサートでは団員の真田正二さんのハーモニカとのダブル特集。

みなさん、ありがとうございました！



また次の記念日に
お会いしましょう！

monnaka mon

15A

since 2

もんながもんじ

15周年
OMEDETO
GOZAIMASU!
yama.